

---

**本命は・・・**

カブ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本命は・・・

### 【Nコード】

N7997A

### 【作者名】

カブ

### 【あらすじ】

今から始まるうとする高校生活。これからの先、この二人に訪れるべきコトが起こりうる。果たして、この二人はその壁を乗り越えるコトが出来るのだろうか！？そして、その壁を乗り越えた先には、一体何が待っているのか！？その鍵はやはりこの岸田翔平という少年が握っている。果たして、神様はどんな未来をこの少年に託するか？どうぞ、ご覧あれw

## ゝブローグゝ（前書き）

ちよつと気分転換に創ってみましたw

## くプロローグく

中3の冬　　。

「ここは、入試に出題されるからきちんと覚えておくように！」  
教師の声がけたたましく鳴り響く。

それから数日後　　。

「とうとうこの日が来たね……。」

「あ、ああ、そうだね……。」

一人の少女と一人の少年の会話が続く。

「では、試験上の注意では……。」

試験員の人の他愛のない説明が聞こえる。

「では、以上を持って　　始め！」

試験員の合図と共に、受験生の必死な戦闘が始まった。

会場内では、ペンを書く音、シャーペンのシンを出す音を鳴らす音、紙をめくる音など一人一人の気持ち外部に出ている風にも見える。

「……はい、終了！」

この言葉と共にチーターが走るような手が一斉に止まった。

ザワザワザワザワ……。

まるで、今からにも大スターの人が現れるとでも言える程の歓喜と、

地獄の果てに突き落とされたような悲哀の表情も浮かべている者もいる。

その中でも未だに合否結果の紙と睨めっこしているヤツもいる。

「え〜と、596番・・・596・・・59・・・6！ あ！ あったあつたー！」

「お！ 翔ちゃんや〜る〜！ 私もあつたよ〜。」

「おお〜、愛美もあつたんだ〜。 いや〜さすがー！」

「ま〜ね〜 えっへん」

冬の終わりを締めくくるような、この二人の会話、いつもの出会いが生暖かいようにも見える。

「新学期から、ウチらここにお世話になるんだねえ・・・。」

一人の少女の表情は期待に満ち溢れていたが、次第に不安という表情に変わっていった。

「なんだよ〜そんな血相な顔しちゃってさ。 ブサイクだぞ。」

「だ、誰がブサイクよ!? これでも私、結構告られてるんだからね!？」

「でも、せつかくのチャンスを台無しにしてるのは、どこのドイツかなあ〜？」

「な、なによ〜!! 毎年バレンタインデー0個のオンパレードのアンタに言われたくないわよ!」

「な、な、な、ここでそれを言うか〜!!」

「あ〜言いますとも。 少なくとも、アンタよりアタシの方がモテ

てるっていう現実を思い知らないかね〜。」

「それは・・・、はい、確かにそうですね・・・。　ブサイクって言うてすいませんでした。」

「分かれば宜しい　でも、アンタの言う「チャンス」を台無しにしてる」は、誰のせいと思ってんのよ〜?」

「誰?・・・て・・・?　そのコトに理由でも?」

「ひょっとしたら・・・アンタのせいよ・・・。」

「え・・・?」

「なあ〜んてね　あはっ!　翔ちゃんの顔ったら〜　おっかし  
い〜〜!」

「ねえ、今の話って・・・?」

「さあさ、合格の文字見たんだからさ〜、　とつとと、塾の打ち上げに行っちゃいましょ　早くしないと遅れちゃうよ〜。」

「あ、ちよつと待って・・・」

一人の少年は手を差し伸ばしたが、もう少女は走り出していた。

新学期から始まる新たな学園（学校）生活　果た  
して、この先に待ち受けている二人の運命は・・・?



## ゝプロローグゝ（後書き）

次回も宜しく



## PHASE・01 いざ出発

ガチャン。

ドアの閉める音が無音にも鳴り響く。

「今日から高校生活が始まるな……。」

俺は、雲からひよっこり現われる太陽を細目で見つめながらそんなコトを思っていた。

そう、今日から高校生活への第一歩の足を踏み入れる。

ほんの1ヶ月前までは、中学生という義務教育だった。でも高校は違う。

今から新しい事々が起こりそうな気配がして、身体がむずむずしてしょうがない。期待と不安というモノに引き寄せながら。

俺の名前は、岸田 翔平「きしだ・しょうへい」。身長168cmと高1ではごく普通の身長だと思われる高さだ。

容姿は、自分で言うのも何なんだが、格好良くもないし、格好悪くもない。言わゆる「普通というやつだ。」

俺は、中3の秋でやっとこの「桜花学園」という高校に進学するこ

とを決意した。

両親は、今、宇宙旅行に行つてて、この1年は帰ってきてない。よつて、家には俺一人で住んでいるというわけになる。

だから、毎日コンビニ弁当という手で済ましている。そう、栄養が偏った食事を取っているのだ。

でも、家に一人しかないおかげで、受験勉強にも集中しやすかった。だから結果こうなったと言ってもよいと思う。

「おつそゝいいい！ もう、翔ちゃんったら、ホントに相変わらずねえゝ……。 もう高校生なんだし、そんなだとマシな大人になれないよ？」

コイツは俺の幼馴染の、華恋 愛美「かれん・まなみ」。小・中と一緒にの学校に通つてた。俺のコトを「翔ちゃん」とか「アンタ」つて呼ぶことが多い。

容姿は、言うまでもなく、むっちゃくちゃ可愛い。この俺がこんなやつと絡んでいいのか？ と思うくらいの可愛さだ。

目はぱつちりと二重型になっていて、まつ毛も少し長い。髪の毛の長さは伸ばしたら肩ほどにまであり、いつもはピンク色のゴムをはめていてツインテール型にしている。

口元を見るとキラキラと輝くような感じであり、少しエロティック  
みたいか、何人ものの男性を魅了しても可笑しくはないという感じ  
をしている。

スタイルはまずまずの安定感であり、慎重は158cm。 至って  
普通の少女だ。

外見を見ると、癒し系と活発に動くような感じがする。

それと、兼ね備えた学園の制服となかなかマッチしているようにも  
見える。

性格は社交的で、ちょっと甘えん坊な所もある。 けど、少しわが  
ままのトコもある。 でも、話していると楽しくないとは思ったこ  
とはない。 あと、何かにつけて自分の言いたいことにはニッコリと  
笑う。 そう、まるで天女笑顔かと思うくらいの・・・。

男なら誰もがオチルと思うくらいの笑顔。 そう、彼女が最も輝  
いて見える時みたいな感じの笑顔。 ホントに可愛らしい。

そのせいか、中3の頃はみんなコイツに惚れてしまったのか、ほと  
とんどの人がアタックした。

しかし、なぜかそれを断ってしまった。 その中にもイケメン級の  
ヤツもいたようだ・・・。

俺は、その理由がとても知りたい。 なぜだが今の自分には分から  
ないけど・・・。

でも彼女はそれを、決して他人に教えようとはしない。そう、今の時点では迷宮入りなのだ……。

そして、俺の場合はこの彼女とは、今友達以上恋人未満という関係を飾っている。

そりゃあ、意識をしたことはないのか？ と聞かれれば、「ない」とは言いきれない。俺が見ても可愛いと思うから。

でも、それを表に出してしまえば今までどおりの関係が崩れ落ちる……。少なくともそれに近いコトにもなる。

だからか、自然と普通の感情で接することが出来るようになっていく。これがいつまで続くかだが……。

「悪い悪い！ ちょっとごちゃごちゃしてたら遅くなっちゃった。ゴメンな〜。」

「まあ、今に始まったことじゃないけどね〜。いいよ、今日は許したげる。その代わり、明日から遅刻したら、容赦はしないからね！」

愛美は、人差し指を1本上の方へ突き出して、ニッコリと微笑んだ。

「うっうっ……。はい、仰せのままに……。」

俺は、この笑顔にホント弱い。何でも言うコトを聞きたくなるこの笑顔……。ヤバすぎる……。恋愛感情を持つてる男性なら、も

う心臓が破裂するくらいのモノだ。

今日は、ホントにいい天気だ。太陽はもう頂上に達したのか、西に傾くスタンバイをするような感じに見える。

家から出るときには雲が結構な程あったが、今は雲一つすらない。まるで今から起こるようなコトがこの人生の中で最も価値のあるもののように…。

「じゃあ、出発しようか！早くしないと入学式に間に合わなくなっちゃうからね！」

「うん、じゃあ行こうか。」

小・中と一緒に登校していたコトもあって、少し呆れ気味の愛美だったが、俺の変わりのない性格を目にした時にはもう普通の態度に戻っていた。

俺達二人は、お互いの家の近くにある「そよ風公園」から学園に向けて一歩一歩足を踏み入れていった。

## PHASE・02 期待と不安（前書き）

この小説のジャンルは恋愛です。      ちょっとコメディが入ってる部分もありますが・・・。

## PHASE - 02 期待と不安

公園から学園まで約15分くらいの距離。

俺と愛美は、隣同士で目の前の風景が学園になるまで無言で歩き続けていた。

そう、これから俺達に何を待っているのか？ イイコトや嫌なこと。それらがどのような形で、どのようにして待ち受けているのか。そう思いながら…。

楽しみで仕方がない。しかしそれと裏腹に、やはり不安なコトも多々ある。

イイコトだけを過ごして、嫌なコトを通りすぎる・・・というそんな虫のいいことなんて言えない。

イイコトがあるから、嫌なコトもある。嫌なコトがあるから、イイコトもある。

イイコトがなかったら、嫌なコトもない。嫌なコトがなかったら、イイコトもない。

こういう好循環があるから人生っていうモノは成り立つ。

だから、これから先に起こることを、すなわち、イイコトでも嫌なコトでも受け入れなきゃイケナイ。

そう、例えば愛する人が出来て、その人の身に何が起こってもそれを

受け入れなきゃイケナイ。

果たして、その頃の自分はそういう心を持ち合わせているのか？  
もし、持ち合わせていなかったら？

この季節は桜の舞う季節。

下を向いたら、歩く至る所に桜の絨毯じゅうたんが見られる。

上を向いたら、桜の木々からピンク色の花弁がひらひらと舞い落ちてくる。まるで踊り狂っているように…。

まっすぐを見たら、桜吹雪・・・とまではイカナイが、まるでその道を通る人を歓迎するかのような祝福らしきな感じもしてくる。

他の人達がこの道を笑顔を見せながら通るという行動が、何か人間に必要な何かを知らされるような想いもしてくる。そう、いい気分で…。

桜といえば、入学のシーズン。つまり、何もかもが「始まり」の季節。

涼しく心地よい風に揺られる桜の木も幸福のように嬉しさのあまり踊っているようにも見える。　　すごく楽しそうに　　。

「やっとな着いたね・・・。」



今まで無言の愛美だったが、着いたときにはもう普通の状態だった。

「そうだね。ここが……。」

「桜花学園……。私達が期待と不安を膨らましているモノ。」

俺達は校門の前に立っていた。

表札には「桜花学園高等学校」と書いてある。

後ろを向くと、今まで歩いてきた桜の絨毯が敷かれている状態だ。

周囲には俺達と同じくして登校しているヤツらや、もう到着していて学校見学をしているヤツもいる。

「お、新入生か？」

俺達は校門の前に立っていた一人のメガネをかけた教師に出会った。

「はい、そうです。あの、入学式は午後2時の体育館で合いますよね？」

愛美は、もう少し何か言いたそうな表情だった。

「ああ、そうだが。」

「今何時ですか？」

「えーと……。今……。1時30分だな。」

「あと、30分あるね。翔ちゃんどうする?」

愛美は腕を組みながら考えていた。

「うーん……。どうしよっか。」

俺も一緒に腕組みなつて考えていた。

「何なら先生がニンテンドーDSを貸してあげようか? 脳トレの。」

先生は真顔だ。それに釣られたのはやはり……、

「先生持つてるんですかあ!? はい! 是非是非やらせて下さい! 私一度やってみたかったんだあ……。」

コイツだった。

「お、おい愛美……。」

「ん? 何? ははーん、翔ちゃんもやりたいんでしょ? でも翔ちゃんは後後。私が先だからね!」

「でもさあ、学校の前でさあ、DSはないんじゃない? 愛美も恥ずかしいと思うし、こっちも恥ずかしいよ……。」

「あーん。脳年齢58歳だった……。何がイケナかったんだろ?」

聞いてね〜！ そりゃあ、前々から言っではいたもの、何もここでやることは・・・。

「ん？何か言った？ あ〜！ 翔ちゃんもやりたかったんだね。はい、これどうぞ。1回やってみてよ！ 脳年齢勝負勝負」

コイツ乗り気だ・・・。 しかもこのちょ〜可愛い笑顔。

「・・・分かった。 やってやろうじゃん！」

俺は最初ためらったが、この笑顔を見て引くに引けん状態になった。それで、腕の服をめくって取り上げた。

実は、俺こ〜いうクイズ系ゲームとかはかなり得意な方だ。 だから、もう勝負なんぞ勝ったもの同然と思っていた。

「・・・つぶつぶ。 翔ちゃん脳年齢66歳だつて〜！！ あははははっ！！」

やってしまった・・・。 恥ずかしい・・・。 余裕をかましていたせいか、なぜかそんな結果になってしまった。

「お、大きな声を出すな！！ 恥ずかしいじゃねえか！」

「だってさあ〜、すごいオカシイって！ 66歳ってあり得ないもん・・・。 ねえ先生？」

あ、コイツ先生に振りやがった。

「君も良く出来た頭だな〜。 そんなんで良くここに来られたな？」

先生ビックリだよ、わっはっはっはっは。」

悪の親玉のような先生の声…。

先生にまで笑われた…。

「ちょっとこれは訳ありで……。」

「そんなもん無いでしょ？ 私ずっと見てたんだからね。」

「むう……。」

もう俺は観念した。言えと言っほど傷つく……。そう思った。

「それよりも、もう1時50分だぞ？ 行かなくていいのか？」

「はっ！ そうだった！ 翔ちゃんがぐずぐずしてるからさ。」

いやいや、アンタ等のせいだって。

「んじゃあ、先生私たち行くね！」

「ああ、行つてらっしゃい。」

先生は、何かをやり遂げたような気分のようにだった。

「あ、そうだった！ 先生何ていう名前ですかあ？」

「ん？ 先生？ どこにいるんだ？」

先生は、キヨロキヨロと辺りを見回した。

「いや、アンタのことだってば……。」

俺は、マジで呆れた。　こんなヤツが果たして先生でいいのか……と。

「あゝ僕？　僕はね、「退屈笑魔」」（たいくつ・しょうま）っていう名前なんだ。みんなからは退屈先生って呼ばれてるんだけどね。良かったら君達もそう呼んで。」

嘘ではないみたいだ。

「退屈先生？　名前からしても、性格からしてもそんな感じですね。非常にユニークで面白いですね。」

「ああ、みんなからもそう言われる。」

「そうですね。では、先生私達もうそろそろ行きますね。それじゃあ！」

愛美は俺を引っ張って走り出した。

この時、俺はちょっぴり愛美のコトを意識してしまった。

「では、改めて行ってらっしゃい。」

先生も先生でこっちをニツコリしながら手を振っている。



**PHASE - 02 期待と不安（後書き）**

次回も宜しくです

## PHASE・03 入学式

「ほら、早く！」

「待つてつて。そんなに早く走れないつて。」

入学式まであと、2分近くになっていた。

「しかし、ここの学園こんなに広いんだね。」

校舎と校舎の間に噴水広場や、花見専用スポット、学園際に使用すると思われる屋台通りや、体育館にあるようなステージも見られる。

グラウンドには、テニスコート9面、野球球場、サッカー・ラグビーなどの大きなグラウンドが見られる。本当にすごい広さだ。

小・中と体育館が大きく見えていたのに、この学園となるととても小さく見えてしまうくらいだ。

「あ！ 翔ちゃん！！ あったあった！ こっちこっち！！」

愛美の手が俺の手をさらに圧縮させた。

「早く中に行こう！！ 入学早々遅刻はマズイからね。」

「分かってるわよ！ ほら、もうひとつ走りよ。翔ちゃんしつかりね。」

そう言いながら俺達は体育館の中に入っていた。



「20XX年度入学式を始めます。」

一人の教頭先生らしき先生の声がする。

俺達は開始13秒前に着いて何とか間に合ったみたいだった。

入学式では、体育館の中で生徒が椅子に座っている状態となっている。

並び順は、名前の早い中学校から順番になっていて、その出席順になっている。

だから、今俺の隣には愛美がいる。華恋と岸田という名字で。

「ねえ、翔ちゃん結構生徒数多いね。」

それもそうだ。この学園への定員数は500人もいるからだ。1・2・3年と約1500名となるのだ。

「これより新入生代表から先輩方々への挨拶文を述べて頂きます。  
……新入生代表、はるかぜ・みすず春風美鈴ステージへ。」

みんなが一斉にステージの方へと目をやった。

階段をミシミシと音を立てながらステージの上にある教壇の所に立った。とても落ち着いている表情だ。

「はくん……。あの人が例の春風さんね。」

「愛美知ってるの？」

「知ってるも何も、あの人前にモデルからのスカウトがあっただって。」

「それで？」

「それでね、彼女悩みに悩んだ末、まず高校生活を十分に満喫してみたと言って断っちゃったのよ……。勿体無い話よね。」

確かにそのような感じだ。

今現時点で見える限り、容姿は言うまでもない。髪の長さはサラサラとした感触のようなストレートロングを繊細に帯びていて、ひらひらと舞うと彼女の心のピュアな気持ちそのものが伝わってくるようにも見える。

スタイルも言うまでもなく抜群。足はスラっとしていて胸の辺りの大きな膨らみが、男の心をモノにするような感じにもさせる。

「成績優秀で美人。おまけにスタイル・運動神経抜群。この学園のアイドル的存在なのよ？」

「へ……。。」

俺は前に居る彼女の顔をずっと見つめていた。

「翔ちゃんその眼差しは何なのかな？」

「え・・・？ それはその・・・。 言わゆる拝見みたいな感じです。」

俺は不意打ちを食らったような感じをした。

俺のタイプ上、申し分のない相手というコトに気がついたからだ。

「ふ〜ん・・・。 翔ちゃんあ〜いう人が好みなんだ・・・。 まあ、分からないコトもないけどね。 さすがはアイドルね。」

愛美の表情が一瞬笑みからず〜っと遠ざかるような表情を浮かべた・・・が、また通常通りの顔に戻った。

「まあ、タイプというのと好きというのとは違いますから。」

俺もちよつと空気を読んで愛美を気遣った。

「でも、翔ちゃんが誰とどうしようが私には関係のないことだしね。」

顔は笑っているようにも見えたが、満面の笑みではない。いつものニッコリ顔でもない。 内心に何かを想っているような・・・そんな感じだ。

そうこうと話をしている時に、新入生代表が話しを始めた。

「暖かい日差しが私たちの心の冷たさも暖かくしてくれます。 冬の厳しかった寒さを押しのけるように・・・。 そう、それが先輩達の

コトでもあります。私たちは、この学園に期待と不安な気持ちを抱えたままここにいます。その不安な気持ちを追い払ってくれる方々・・・先輩達と先生方です。ですから、私たちをどうか導いて下さい。正しいと想う本来あるべきの場所に・・・この先どんなコトが待ち受けているのかは分かりません。でも私たちはそれをどんな苦難があっても良いモノへと変えていきたいと想います。それをどうか見守っていて下さい・・・以上です。」

パチパチパチパチ

。拍手が体育館の中で鳴り響く。

癒し系の声とそれと照り合わせるような台詞がとても合っていて、心ときめいている人が見られる。

汚れていなく純粋な声。まるで女神様のささやきような・・・そんな感じた。

「いい声の持ち主だったね。私女だけど、少し感動しちゃった。」

「うん。俺もすごく感動した。ホントに良い声だったな・・・。」

俺も心の底からこう思った。さすがはアイドルだ。

「良い挨拶文でしたね。それでは次に学園長先生の話です。」

教頭がコホンと咳をして場を促した。

「え・・・本校は・・・。」

と他愛のないお喋りが聞こえてくる。

まるでさっきの良い雰囲気だったモノを打ち消すような、オヤジ声。  
みんなしてもう、聞く気ないみたいな表情をしている。

「・・・では、以上です。」

やっと学園長の演説が終わった。

「以上を持ちまして、20XX年度入学式を終わります。」

みんなの張り詰めていた思いが外に放出され、ため息や、「やっと終わった」という様な達成感の笑みを浮かべている。

「はあ〜、やっと終わったあ〜。」

愛美もそのうちの一人だった。身体全身をあちらこちらに伸ばして軽い笑みをこぼしている。

「それでは、新入生みなさんは、この後すぐにご自分のクラスに入って明日以降の予定を言います。ですので、前にあるクラス発表の紙を貼りますので見に来てください。では、解散して下さい。」

解散と合図と共に今まで「無」のような雰囲気が一瞬にして、ワールドカップ並みの盛り上げを見せている。

同じ仲間と外れて残念がっている人や、同じクラスになってテンションが上がっている人などさまざまな人たちが見られる。

「私達も見に行こつか。」

だんだん人が少なくなった頃に俺達は紙の貼つてある所まで行つた。

「えゝと、岸田、岸田・・・。」

「えゝと、華恋、華恋・・・。」

俺達はお互いに自分の名前を探した。

「あ！ あつたあつた。」

先に見つけたのは、やはり愛美だつた。

「あ、ホントだ！」

俺も愛美の後を続くかのように見つけ出すコトが出来た。

「・・・また同じになっちゃったね。」

「・・・うん。」

「改めてこれからもヨロシクね。」

「おう。こちらこそ宜しく。」

これは何かの運命なのか？ ヤハリ、コイツと絡むことが多く、何かにつけて同じになることも多い。

でも悪い気はしない。　むしろ嬉しい。

「あ．．．！」

俺は、改めてクラス発表の方へと目にやった。

するとそこには、「春風美鈴」と書かれた文字があった。

俺は、この時運命というモノを初めて考えた。

愛美はまだこのコトには気付いてない。

これからどうなるのか？　この先には一体何が．．．？

「ほら、翔ちゃん行くよ！　早くしないとまた遅刻寸前になっちゃうよー！」

でも、この悩みの存在のモノを愛美の笑顔によって消え去った。  
非常にスッキリした気分になった。

「んじゃあ、行こっか。」

「じゃあ、教室まで競争ね　負けた人はジュースのおごりということだ」

「あ．．おい．．．。　待てって〜！」

俺達は、誰もいない体育館を後にして教室に走りだした。  
。





## PHASE・03 入学式（後書き）

なるべく早く更新するつもりですので、宜しくです。

PHASE・04 春風美鈴

「ま、愛美ちよつと待てよ〜!」

「待てって言われて待つ人がどこにいるのかなあ〜?」

俺達は、無我夢中で走っていた。

けど、あつという間に自分達の教室に着いた。

「翔ちゃんの負け〜。ジュースおごりね!」

「はあはあ・・・分かったよ・・・。」

愛美も愛美であんなに走ったはずなのに、吐息すら見せなかった。

それと比べて俺は、もうバテバテだ。やはり、半年運動をしていないせいかなうなっちゃったりしている。

「翔ちゃん、もう息上がってるね〜。私なんてまだ余裕よ」

何でなんだろうな、この差は。

ガラガラ。ドアの開ける音がする。

「はい、それでは〜みんな席に着け〜。」

一人の学年主任っぽい白髪 of 髪 of 先生が教室に入って来た。

この時俺と愛美は教室の中で少しお喋りしていた。

そして、俺達以外の人達も仲のよい友達同士でお話をしていた。

その先生の合図と共に教室の中は静まりかえって、椅子を滑らす音だけが鳴り響いていた。

俺の席は窓際 of 一番後ろの方だ。それで、その前の席には・・・、

「翔ちゃん、あの先生何歳だと思う？」

やはり、コイツだ。

何かの因縁があるみたいか、くつつくのがやけに多い。

「そんなもん知るか〜！」

「こらそこ！ 静かにしなさい！」

愛美の質問は小声だったのに、俺の返答は少し大きな声だった。

「もう、翔ちゃん。声が大きいってば。」

「いや、すまん・・・。」

何で俺が？ と思うくらいの悲しさだ。

「それでは、このクラスの担任を紹介する。」

その言葉と共に一人のメガネ教師が現われた。

「なぜ・・・？」

「あ！ あの面白い先生だ。」

そう目の前に現われたのは、

「どうも、退屈笑魔です。 1年間宜しく。」

あのDS先生だ。

と、俺達の声に気付いたのか、こちらに目を向けた。

「ああ。君達は・・・。何か面白い出会いだね。 1年間宜しく。」

とまあ、のん気そうな声をしている。

「は・・・はい。」

「はい、宜しく願います！」

と、俺達のそれぞれの対の気持ちが溢れていた。

「ああ、そうだった。春風さん、僕のお手伝いありがとう。さあ、席についていいよ。」

「はい、分かりました。」

ドアの前に立っていた少女、春風美鈴が出てきた。

そして、徐々に俺達の近くに来て、俺の隣に座った。この時初めて気がついた。俺の隣の席が空いていたことを。

「春風美鈴です。宜しくね。」

彼女はこちらを向いてお上品そうに軽いお辞儀をして、ニコやかに笑った。

「よ、宜しく。」

俺も軽いお辞儀返しをした。

「では、明日以降のコトだが……。」

とまあ、あのDS先生の雑談が聞こえる。

俺はこの時、二人の美女が目の前にいる状態を知って、内心テンションが上がっていた。

「それでは、また明日。元気で!!」

先生はそう言い残してスタスタと教室を後にした。と、それと同時にクラスのほとんどの男子が春風美鈴の所へやって来て、

「春風さん! これどうぞ!!」

「あ、僕のもどうぞ!!」

と、メルアド入りのラブレターを渡した。

本人も少し困り顔で、

「あ、ありがとう……。」

と、苦笑いをしていた。

男子も男子で、自分の想いを伝えたせいか、達成感の顔に満ち溢れてその場を去った。

俺は、その光景を啞然として見ていた。愛美も同じ様に。

でも、恐るべし学園のアイドル……。ここまでの人気があるとは……、いや、このような光景を目にしたのは初めてだ。

そう、クラスの男子の心を自分のモノにしたような感じだったのだ。

「大変ですね……。全部読むですよね？」

俺は、彼女の机の上にある大量のラブレターを目をぱっちりして見ながら言った。

「中学校の時もこんな感じでしたから、もう慣れちゃってますけどね。一応目は通しますけど、後はどうなるか……。」

彼女は、アドレスの書いてある紙を見て、深いため息をした。

「分かります……。その気持ち。私の場合口でしたから、相手の顔

を見て返答するのが辛かったですからね……。」

愛美も愛美で、山積みになっているラブレターを見つめていた。

「そうですか……。そちらも大変でしたんですね……。」

彼女もまた、山積みになっているラブレターを見つめて言った。

この俺には分からない世界。 モテルという現実。

他の人から見れば羨ましいと思うのが当たり前かもしれない。

けど、それは見かけだけの問題で、本人はそうではない。

俺は初めて、この現実を思い知らされた。 モテル人が大変だということを……。

「そう言えばお名前を伺っておりませんね……。失礼ですけど、お名前は……？」

「俺は、岸田翔平って言います。」

「私は、華恋愛美って言います。」

「そうですか……。あなた方お二人は恋人どうしなんですか？」

「いえいえ、恋人ではないです！ 単なる幼馴染です。」

俺は、何故か完全否定するかのように強く否定してしまった。

「そ、そこまで否定しなくても……。」

愛美は何故か、俺の方をギロリと睨んでいる。

「そうですか……。でも、恋人同士に見えますよ？ 他人から見ればですけどね。」

「他人から見ればだけです！」

俺はこの時むっちゃくちゃ動揺していて、心にも無いことを言ってしまった。

「だから、そんなに否定しなくても……。」

愛美は悲しそうにこっちを見つめている。

「確か岸田翔平君でしたよね？」

彼女は念を押し入れるかのように質問してきた。

「はい、そうですけど……。」

「分かりました。それでは、お先に失礼しますね。では、また……。」

彼女はそう言いながら机の上の大量のラブレターをカバンの中に入れ、立ち上がってこちらを向いてニッコリ顔でお辞儀をして教室を



去っていった。

「何で最後名前を質問したんだろ・・・。」

俺は、サッパリ分からなかった。

「何か意味があるんでしょうね・・・。」

愛美もこのコトに疑問を抱いていたようだった。

気がついたら教室の中には俺達二人だけが取り残された状態となっていた。

「もう、誰もいなくなっちゃったね。帰ろっか。」

「うん、そうしようか。」

俺達は、机の横にぶら下げていたカバンを取り出して、教室を後にした。。。

PHASE・04 春風美鈴（後書き）

ネタが底をつきそうにないので、どんどん書いていきたいと  
思います。

PHASE・05 久々の一人

「明日の朝ゴメンけど先に行つてて。」

昨日の帰りに聞いた言葉が歩きながら思い出す。

今日の登校は珍しく一人だ。

小・中学校の頃から一緒に登校していたこともあって、少し寂しく感じる。

でも、過去に何回かこういう時もあったので、大して気にしなかった。

今日も通学路に桜の絨毯が見られる。

校門の前に来た時、何か落とし物をしたかのように何か探し物をして  
いる人がいる。

「あ、おはよう岸田君。」

その人物は春風美鈴だった。

「お、おはよう。ここで何してるの?」

手を地面のあちらこちらに当てている彼女に問いかけた。

「ちょっと、コンタクト落としちゃってね。探してるの。」

周りには、もうすぐチャイムが鳴るせいか一人もいない。

「よし！俺も探すわ！」

目の前に可愛い美女を放っておくことは出来ないと思い、彼女と一緒に探してあげることにした。

「でも・・・、もうすぐチャイム鳴っちゃうよ・・・？」

「いや、いいよ。困っている人を目の前に放っておくなんて出来ないからね。」

「あ、ありがとう・・・。」

彼女はしばらく俺の方を見つめていたが、お礼の言葉を言い終わると共に探す仕事を再開し始めた。

「どこらへんに落としたか覚えてる？」

俺は辺りをキョロキョロした。

「えーと、多分ここらへん・・・。」

と、言い終えた時俺は、桜の花弁の下に何かがありそうなヤツを見つけた。

それをめくると、

「もしかして、これのこと？」

「あ、そうそれです！ 良かった〜。どうもありがとう。」

彼女はほっと胸を撫で下ろして、ニコヤカにお辞儀した。

「どういたしまして。まだチャイムが鳴るまでに時間があるよ。」

「あ、本当ですね。こんなに早く見つかると思ってなかったもんで・・・。急ぎましょうか。」

そう言っただけで俺達は教室へ走り出した。

「え〜・・・ここで、ドモルガンの法則を・・・。」

先生の眠たそうな声が聞こえてくる。

何とか俺達は間に合ったみたいだ。良かった。

でも、愛美の姿が見えない。今日は欠席なのかな？

「今日は、愛美さんの姿が見えませんか・・・。」

「たぶん、家の都合があるんだよ。」

俺は、説得力に欠けている返答をした。

「あれ・・・？」

突然、春風が机の中を探りながら言い出した。

「どうしたの？」

「また、無くなっちゃった・・・。」

「何が？」

「シャーペン・・・。いつもこうなんです。中学校の時も・・・。」

何となく想像はつく。

彼女のコトに惹かれていて人なら彼女の使っている物を使いたいという欲を持っている人もいるかもしれない。

でも、そこでシャーペンを？ という疑問が生まれてくるが、まあ気にしないでおこう。

「じゃあ、俺のを貸してあげようか？」

「で、でも、それ1本しかないのでは・・・？」

「うん、いいいいいよ。後で友人に見せてもらえばいいしね。それより春風さんは、俺より頭むっちゃくちゃいいから・・・ね！」

「で、でも・・・。」

「いって！心配しないで。」

俺はこの時自分のコトなど、どうでもいいと思った。

俺みたいに勉強に意欲がないヤツより、頭良いヤツに譲った方が効率がいい・・・と思ったからだ。

「あ、ありがとう・・・。岸田君優しいんだね。」

彼女は俺のシャープンを、優しそうな白い手で受け取った。

「いえいえ。でも、優しい人は俺以外にも沢山いるけどね。」

俺は、ちょっと照れくさくなりながら言った。

「ううん、そういう優しさじゃない。何ていうか・・・、その・・・、うまく言えないけど・・・。」

彼女は言葉に詰まりながらも、俺には何が言いたいか少しだけ分かった。

それを聞いた時、むっちゃくちゃ嬉しかった。そう、あの愛美にすら言われたコトなく、初めて女の子に言われた言葉だったから。

キンコーンカーンコーン　　。

「・・・もうチャイムが鳴りましたか。　では、終わります。」

と、教師は持っていたチョークを置いて、そう言い残して教室を出て行った。

俺も昼食の準備をし、食べようとした時、

「ねえ岸田君、お昼一緒に食べない？　その・・・色々とお話したいし・・・。」

学園のアイドルからのお誘いだ。

でも、何で俺？　と思うくらいに・・・。

こんなトコ他の男子に見られたら殺される・・・と一瞬脳をよぎった。

でも、せっかく誘ってくれてるし、俺も春風のコトをいっぱい聞きたいと思って、

「うん・・・、別にいいよ。」

とあっさりOKしてしまった。

「じゃあ、5分後屋上に来てね。待ってるから。」

彼女はそう言い残し、その場を去った。





## PHASE - 05 久々の一人（後書き）

ちよつと先を急ぎすぎて、意味が分からないと思った方は自分の未熟さを許して下さい。

PHASE・06 屋上

俺は自分の昼食を持ったまま屋上へと向かった。

「岸田君遅いよ……。」

春風は顔を膨らませながら少し怒っていた。

「ゴメン……、ちよつと購買に買い足しに行つて遅くなつちやつてさあ。」

学園という学校になってから、便利なコトに購買という昼食が買える所がある。

でも、便利なせいか人がいっぱいいて、自分の目当ての物を買うのに時間がかかる。そこところが凶かな。

「それならしょうがないね。」

春風も怒り気味の顔だったが、いつもの顔に戻って俺は、安心した。

「じゃあ、食べよつか。」

俺はそう言つて、さつき購買で買ったおにぎりをむさぼった。

彼女も彼女で、自分で作つた弁当を取り出してお上品に食べている。

「私ね、実は昔から男の子というのが苦手なんだよね……。」

「何で？」

俺は、疑問に思った。俺も一応男なんだけど・・・と。

「小学校までは、まだ私恋愛対象として見られなかったの。だから普通に男の子とも喋るコトが出来たの。小学生だからまだ、そういう感情が無かったのになって。でも、中学生になったとたん急に私のコトを意識して、小学校の頃に普通に喋っていた男の子までもが意識し始めちゃって・・・。そうなっちゃってから、ラブレターとか、告白とかの毎日で・・・。そのせいで私男の子を好きになることが出来なかった・・・。自分の好みの男の子を探す余裕がなくて・・・。」

彼女は、胸の奥そこに今まで溜まっていた想いを俺に打ち明けてきた。

「私もう、それが嫌で嫌で学校に行くのも嫌になったんです。でも、それを助けてくれたのが友人達だったんです。ホントに嬉しかった。私にあんまり近づかないであげてって・・・言ってくれたんです。そのおかげで前よりかは人数が減って、少しは楽になったんですけどね・・・。」

彼女はさらに話し続けた。

「それで、何とか卒業まで我慢出来たんです。それで高校生になって、この学園に来られた・・・。そして、初めて岸田君に会った。岸田君に初めて会って、私何だか懐かしい感じをしたんです。小学生の頃楽しく喋っていた男の子にそっくりで・・・。理由はですね、私が隣の席になっても他の男の子みたいに好き好きオーラを出さず、同性同士みたいな話し方で接してくれたことです。それが私にとっ

て嬉しかったんです。それが夢でもあったんです。男の子と普通にお話しが出来て、普通に行動するということ……。」

そーいうコトだったのか。俺の今までの疑問を打ち払うかのような証言だった。

だから、俺に話しかけてきたり、昼食を誘いに来たんだ……と。

「それから、徐々に恋愛感情へと発展していくっていうことってあるじゃないですか。私、そーいうのにすごく憧れていて……。簡単に言ったら、今まで私が出会った男の子の中で初めて出会ったタイプなんです。だから、つい興味を持ってしまったんです……。岸田君に……。」

俺は、納得納得の感情でうんうんと頷いた。

「だから、お友達になって下さい。　こんな私ですけど……。」

付き合って下さいと言われたら、考えモノだったが、お友達になって下さいと言われれば、

「うん、そのつもりだよ。」

と当然にOKしてしまう。

でも、お友達になる時は自然になっていくモノだと思っていたが、「なって下さい」と言われてなるのとは少し違う気がしてならない。

「あ、ありがとうございます……。」

「いやいや、お礼はいらないよ。当たり前のコトだからね。」

俺は、彼女が恥ずかしそうな表情をしていたのでそれを浄化させるような満面の笑みで答えた。

もう、すでに俺達は自分の食うべき物を食い終えた状態になっている。

「もう、俺達友達同士になったんだからさあ、まだ何か言いたいことがあるなら言っちゃっていいよ。」

俺は、彼女がまだ何か言いた気な表情を目にした。

「では、お言葉に甘えて……。岸田君は好きな人いるんですか？」

「え？何でまた急に？」

急なる予想外の質問で俺はびっくりした。

「気になったものですから……。」

春風は俺の顔をじゅっと見つめている。

「うーん……。良くわかんないな……。気付いたら好きになっちゃってる状態っていう感じだからさ。」

俺は、彼女から目をそらしながら答えた。

「じゃあ、今現時点ではいるんですか？」

またまた見つめてくる。緊張の張り詰めた表情だ。

「・・・今はいないよ。これから出来るかもしれないけどね。」

過去、女の子という者を好きになったことはあるが、でも今現時点での状態では、そういう感情は無い。

「そうなんですか。」

彼女は嬉しそうにニコニコしている。

「そういう春風さんはどうなの？」

「美鈴って呼んでください。もう友達同士なんですから・・・。」

さっきのニコニコ笑顔とは程遠くのモノ悲しそうな表情を見せた。

「じゃあ、美鈴さんはどうなの？」

「美鈴・・・。」

「美鈴はどうなの？」

「私は・・・。」

なぜか、ゴクリと唾を飲んでしまう。

「ひ・み・つです。」

「あゝずるいぞ、美鈴だけ言わないなんて。」

「だって、言っちゃったら面白くないじゃないですか。」

美鈴は、クスッと笑いながら俺にウィンクした。

か、可愛い……。俺は内心温かみを覚えた。

もしかしたら、恋に落ちてしまうような……。そのような感情に一瞬よぎったからだ。

キンコンカーンコン。昼休みの終わりを告げる音が聞こえる。

「早いですね……。もう少し話したかったのに……。」

美鈴は残念そうに首を下に向けている。

確かに今まで良いムードだった空気がチャイムの音と共に妨げられたのだ。

「でも、隣同士なんだからさ、いつでも話なんて出来るじゃん。」

「愛美さんがいる場合でも、そんなコト出来ますか？」

愛美がいる場合！？ 確かに言われてみればそうだ。

今日は愛美がないおかげで、ここまでアイドルと仲良くなれたん



だ。

もし、いつもどおりに愛美がいたら、俺は愛美を気遣って愛美の方へ行ったかもしれない。

でも今は違う。俺は今一人なんだ。

「それは・・・。」

俺はそんなコトを考えていたせいか、言葉に詰まった。

「なら、岸田君のメルアド聞いてもいいですか？ いつでもお話したいと想っているんで・・・。」

お、俺のメルアド！？

愛美ですらに教えていないメルアド。

しかも、女子とメールしたことがないこの俺が、女子とメール出来るなんて・・・。

実は、昔からそれは俺の夢の一つでもあった。

女子とメールすることって、何か温かみを帯びていて良い気分になりそうな予感がある。

しかも、それが学園のアイドルとなると尚更だ。

「美鈴は、俺以外に男子とメールしたことは・・・？」

「ありませんよ。」

あっさり言い放った。

「じゃあ、あのラブレターのアドレスは・・・？」

「あれは、送らずそのままにして保管してあります。」

とまあ、あのラブレターに入っていたアドレスには目を向けなかったという真実が今ここに証明されたのである。

「やっぱり、興味がある人とメールをしてみたいっていうのは誰もが想うコトですからね。」

あのラブレターに入っていたメルアドは興味がないと言っのか？

「聞いてもいいですか？」

美鈴は両手を重ね合わせ、こっちの出方を伺っている。

「う、うん。いいよ。」

こっつい場合は何というべきなのか？

俺は素直に返事することしか出来なかった。

そう言っ俺はポケットにある携帯を取り出して、自分のアドレスが載っている所まで探った。

美鈴も美鈴で、ポケットから携帯を取り出した。

こうして俺達は無事アドレス交換を成し遂げた。

こんな可愛い子と交換出来るなんて夢みたいだ……って思いながら。

「岸田君とアドレス交換出来た……。何か夢みたい。」

それはこっちも同じだ。なんせ学園のアイドルと交換出来たからだ。でも、俺はちょっと調子に乗ってしまいそうな気がした。その気持を抑えようと必死だった。

「さあ、もう授業が始まっちゃうね。行こう、翔平君」

初めて下の名前で呼ばれた。

関係が深まるにつれ、どんどん何かが変化していく現実を見て俺はビククリした。

「うん、行こうか。」

でも、その表情を内心だけに留めておいた。

俺達は、青春の香りが残る屋上を後にして教室へ向かった。



**PHASE - 06 屋上（後書き）**

次も宜しくです

## PHASE・07 お誘い

「んで、本命はどっちなんだよ？」

「な、な・・・別にそんなんじゃない。」

コイツは俺の小学生の頃からの親友、あらし・ゆうた嵐勇太だ。

身長は172cmと俺より高い。

しかも足が長く、容姿はイケメン級だ。

そんなせいか、中学校の頃は5人くらいと付き合ったコトがあるらしい。そう、まさにプレイボーイ級のヤツなんだ。

過去俺の恋愛相談にのってくれたコトもあって、どんなコトでも話せる唯一の相手と言っている。でも、少なくとも向こうもそう想っていてくれるようだ。

だから、俺はコイツと絡むコトがホントに多い。あと、二人で遊んだりと まあ、ごく普通の友達関係を築いている。

たまに、愛美とも一緒に行動して3人と食事をしたり、遊ぶコトもある。

今、愛美は愛美で新しい友達が出来たみたいかそっちの方へ行っている。まあ、あんなに社交的なヤツやからすぐに友達くらいなら出来るだろうけど・・・。

それを見計らったかのようにコイツは俺の所へ足を踏み入れてきて、ささやいてきたのだ。

「最近、愛美との行動も多くなるわ、お次は学園の可愛い子ちゃんとメルアドを交換するわ、そこまでやっという意識しないはずなんてないのでは？」

勇太は薄気味悪い笑みを浮かべながら、皮肉った言い方をしてきた。

「それはまあ・・・、何ていうか・・・。」

俺は完全に言葉に詰まった。

そりゃあそうだ。この現実くらい自分でも分かってる。

でも、それをどう受け止めたらいいいのか分からないのだ。今まで、愛美以外の女子とは喋ったコトはないし、愛美との行動もあそこまでは多くなったこともない。そう、この何かの変化に俺は分かっているのだ。

「俺様だったら、もうどちらかにアタックしてるんだけどな・・・。困ったオクテさんだ・・・コイツは。」

勇太の顔は呆れ顔へと変わっていった。

「だってしょうがないじゃねーか。こんな体験初めてだし、どう受け止めたら・・・。」

「素直じゃないってコトだな。それは。」

勇太はチチチと舌打ちしながら指を左右に動かした。

「でもまあ、何か変化あったら俺様に何でも言ってくれよ？ この状況なかなか目を見張るモノがあるしさ」

「どういう意味だよ、それ…。」

「そういう意味だ。じゃあな、オクテ君」

勇太は自分の言いたいコトだけを言っつてその場を去った。

「オクテって…。お前がプレイボーイなだけだろうが…。」

俺もそういい残して、その場を後にした。

「いい天気だね、こんな日はのほほんとした気分だね。」

「俺はゴロゴロしたいな。」

「同じコトでしょうが。」

久々の愛美との下校だ。何だか懐かしく感じる。

帰り道には入学式桜の絨毯が見られた所が、あっという間に葉の絨毯へと変わっている。

「あのさ……翔ちゃん……。」



突然、愛美の思いつめた表情を浮かべ始めた。

「何だよ…。」

俺はちよつぴり緊張した面持ちだ。

「最近、何か春風さんと仲良いみたいだからさ…。」

出たこゝという質問。

さっき、一応友達の勇太にも言われたコトだ。

「そう？　俺は普通に接しているつもりだけど。」

ちよつと嘘染みた答えになってしまった。

「でも、春風さんは翔ちゃんに気があるんじゃない？」

「うゝん…、どうかな。」

確かにそうかもしれない。けど、今はそう断言仕切れない。

だからか、また俺は言葉に詰まった。

そう言い終えた時、長い沈黙がした。歩く音だけが喋り声のように聞こえて仕方なかった。

「じゃあまた明日学校でね！ バイバイ。」

さっきの表情とは逆に、愛美はいつもの表情に戻っている。

「うん、じゃあまた明日。」

俺も今までの重い雰囲気を通ち切るかのような笑顔で言った。

「今日は疲れたな…。」

今日は、親友と愛美にも同じコトを聞かれて精神を破壊されるかのような気持ちになったのだ。

そりゃあ、疲れて仕方がない。

俺はそう思いながら、自分の帰るべき場所へと足を踏み入れた。

俺は天井を見上げている。

「はあ、ホントに疲れた…。」

こんな言葉を言っても疲れはとれないということを知ってながらも、  
つい声が出てしまう。

そう言いながらだんだん、まぶたが閉じていった時

「ブーン、ブーン、ブーン。」

突然鳴り出した、携帯のバイブ音。

せっかく転寝してきた時にこれだ。

今はもう非常に眠い。このまま放っておいて寝たいと思っている。

でも、何故だか手が勝手に受信BOXへと探り始める。

で、目も勝手にそれを追ってしまう。

“こんな時間にゴメンネ翔平君。明日暇かな？”

これは・・・お誘いのメールだろうか。でも、「暇？」と聞かれているのでそうだろう。

明日は土曜日という休日だ。

俺の場合、家でTVを見るか、ゲームをするか、パソコンをいじるか・・・というコトしかやることはない。

あえて言うなら、いつも暇人だ。

美鈴とはあれ以来友達関係になったというものの、彼女は積極的にアプローチを仕掛けてくる。

でも、悪い気はしない。

そんなにシツコクないし、空気だっただけで読んでもいい。

そんな部分に惹かれるモノだってある。

そんなコトを考えながらやはり答えは、

“一応暇だよ。”

とまあ、当たり前前の答えを出した。

続いて美鈴は容赦なくメールを送ってきた。

“じゃあ、明日10時に学園の校門前に来てネ。待ってるから。”

結構甘い感じを覚えた。

前にあれから何度か美鈴とはメールしたものの、学校のコトとか、自分の紹介くらいしか話してない。

でも今日は違う。列記としたお誘いメール。

「友達・・・だよな・・・。」

俺は自分の心にそう言い聞かせたように呟いた。

みんながみんなして、あんなこと言うから・・・どうしても意識してしまいがちだ。

“分かった。”

“それじゃあ、お休み”

“うん、おやすみ”

俺は、やはり眠いこともあったのでメール上口数が少なかった。

そう思っていると、もう、やる事を済ましたせいか、まぶたが自然に閉じていった。

PHASE・07 お誘い（後書き）

昨日多く更新してしまったせいか、今日は1種しか更新出来ませんでした。

## PHASE - 08 デート（前編）

「ご、ごめん！ 待った・・・かな？」

時刻は10時30分を回っている。

確か集合時間は10時だったような…。

「うん、いっぱい待った。」

過去に1回待たせたコトもあって、美鈴は結構怒ってそんな表情だ。

「ホントにごめんな。お詫びと言っちゃあなんだが、その・・・何かおこったからさ。」

俺は頭をポリポリかきながら述べた。

「しょうがないですね。翔平君がそこまで言うなら許してあげます。でも、約束はちゃんと覚えておいて下さいね。」

美鈴はだんだんいつも通りの表情へと戻っていった。

敬語の時の口調と、敬語じゃない口調の違いを聞いてみると、何か別人が話しているような気がしてならない。

この使い分けは何だろう…。

今日は休日のせいか、学園の周りに人が見当たらない。

その学園の姿を見てみると、いつもと違う姿を象っているような気がしてならない。

「さて、これからどこに行きましようか…。」

まだ決めてなかったんかい！　って突っ込みたい気持ちでいっぱいだった。

でも、これはしょうがないと思った。

何て言っただって、美鈴も俺みたいな男性と二人っきりでどこかに行くというのは初めてだ。

女の子となら行く場所は簡単に決まるのだが、異性となるとそうはいかないようだ。　美鈴の場合…。

そう思っていた俺だったが、美鈴はやっと答えが辿り着いたようだ。

「では、最近駅前に出来た、『ムーンライトデパート』っていう所はどうですか？」

「ああ、確か最近出来たみたいだもんね。　でも、あそこは…。」

そう、そこはカップル専用スポットの場所でもある所なのだ。

前に勇太が言っていたのだが、

『あそこは凄いい〜。俺も行ったコトはあるんだが、もうほんとんどがカップルの溜まり場でさ〜、ラブラブムードに発展しまくっ



てるんだよね。だからさ、自分達もそうしなくちゃイケナイ  
みたいな感じにさせてくるんだよね。簡単に言えば、人を簡単に  
その気にさせられるコトが可能な所なんだ。この俺でも、結構危な  
かったしな」

コイツの言う『危ない』は何だろうと思いつつも、まさかこの俺が  
その場所に縁があるなんて夢にまで思っていなかったコトだ。

それを軽々しく言う美鈴も美鈴なんだが…。

果たして美鈴はこのコトを知ってるんだろうか？

「あそこ・・・何？」

「あそこはさ、何かほとんどがカップル専用スポットらしいなん  
だよ〜…。」

「うん、知ってるよ。」

し、知ってる！？

知ってて、良く軽々しく俺に言えたもんだと思う。

「翔ちゃんが嫌って言うんなら無理には言わないけど…。」

「べ、別に嫌とかそんなじゃないけど…。何かこう…俺でいい  
のかな〜って思っちゃってさ〜…。」

「ダメだったら、ここに呼んでませんよ?。」

「確かに……。」

確かにそうだ。

もし、俺と行きたく無かったら何もここに呼ぶ必要なんてないからな。

「分かった、じゃあそこに行こう。」

とあっさりOKしてしまった。

内心少し複雑な面持ちだ。

「では、行きましょうか。」

俺達はそう言い残して、例の場所へと歩んでいった。

。

「やっと着いたね。」

俺達は、学園から少し歩いた所のバス停から駅まで行って、5分の歩きでここまで来れたのである。

「ちょっと疲れちゃいました。」

こんな少しの短旅でも、美鈴は疲れの表情を見せた。

「じゃあ、ちょっと早いけど昼ご飯食べようか。」

デパートの中には、数多くの時間を過ごせる場所があるはずだ。

俺達はその内の一つに行こうとしている。

「はい、そうですね。」

「美鈴は何か食べたいモノでもある？」

「え〜と、パスタ系が食べたいですね。」

「じゃあ、それにしようか。」

美鈴の案により、俺達はパスタが食える所まで移動した。

「え〜と、私は、明太子スパ下さい。」

「じゃあ、俺はミートを下さい。」

「え〜と、明太子とミートですね？ 少々お待ち下さい。」

店員さんはそう言い終わると、注文表を持っていった。

美鈴の顔を見ると、こっちの顔を見ながらニヤニヤ笑っている。

「どうしたの？ そんなにニヤニヤしちゃって。」

「だって、何か嬉しいだもん。翔平君とこんな場所に来れて、一緒に食事をしてるっていうコトがです。」

過去愛美とは、二人っきりでこんなことをしている時もあつたが、  
そう多くはなかった。

少なくともその時は、完全に男と女という関係を意識はしていなかったが…。

でも、今日は美鈴の一言一言が、その異性の意識をさせるような感じにさせられて仕方がない。

そのせいか、俺もだんだん照れくさくなってきた。

でも、良く見ればこんな学園のアイドルと一緒に行動が出来て、一緒に食事がとれるのだ。

普通の男なら、これ以上の幸せはないと思えるくらいだ。

俺も俺で普通の男だから、心に花を咲かせたような気分になってしまった。

今、美鈴を意識していないかって言われて、「意識していない。」

とは言い切れない。

初めて会った時から結構俺のタイプだったし、申し分のない相手として理解している。

だから、何か決定的な出来事が起こってしまったら俺は、美鈴に夢中になってしまうような気がしてならない。

でも、俺にはそれを妨げるような暑い壁が覆われているような気がして、その先に進むコトが出来ない状態になっている。　愛美のコトも…。

要するに、素直じゃないって言った方が正しいのかもしれない。

好きなのに好きじゃない。そういう変な循環が俺の心を惑わしてしようがない。

この壁を取り除くには何が必要なんだろう。

もし、取り除いたとき俺はどうなってるんだろう…。　そんなコトを思っていると、

「お待たせしました、明太子とミートです。」

と、今までの思考をかき消す様な店員の声が聞こえてきた。

「うっん。　これ美味しい。」

美鈴は頬を撫でながら味を確認している。

「うん。美味しい。」

俺もちやつかりと美鈴とリアクションをとってしまった。

「あら、翔平君ほっぺにミート付いてるよ?。」

「え、どこどこ?。」

「じゃあ、顔ちょっとこっちに寄せて。」

「こ、こっ…?」

ぺろ。

「え…?」

「てへへ。翔平君のほった柔らかいね。それにそのミートも美味しいね」

美鈴の舌が俺の頬へと挨拶をしてきたのだ。

俺は動揺を隠し切れなかった。

ここまでやってくるなんて…。

そんな俺の表情が面白いせいか、美鈴はニコニコこっちを見ながら笑っている。

頬を撫でてみると、確かに美鈴の感触を感じる。

何と凄まじい開放感。何かに縛り付けられていたモノが解かれるような…そんな感じを覚えた。

「あ、私も明太子付いちゃった。」

何かを訴えるような眼差しが、俺の心を惑わしてくる。

俺も俺で心臓の鼓動が早まりつつなってきた。

でもまあ、さっきの『お礼』というコトなら別に抵抗感はないモノに変わっていくだろう・・・。

そこでとうとう俺は決心した。

「顔、ちょっとこっちに寄せて。」

美鈴は待ってましたと言わんばかりの笑みで頬をこっちに近づけてくる。

ぺ口　　。

「えへへ　アリガト」

やる側もやる側でむっちゃくちや恥ずかしくてたまらなかった。

でも、あんな目で見られちゃあ、さすがに素通りなんて出来ない。

しかも、やってもらってお返し無しのも感じを悪くしちゃうかなとも思った。

俺達は、そんなこんなとあまゝい昼食の日々を過ごした　　。





PHASE・08 デート（前編）（後書き）

今までなかなか書けなくてすみませんでした。これから、暇を殆ど費やすくらいの気もとで頑張っていきたいと思います。

PHASE・09 デート（後編）

「あゝお腹いっぱい」

美鈴は、お腹を抱えている。

俺も俺で、お腹と心がいっぱいになった。

「ねえ、翔平君。手繋ごつか。」

周りを見渡せば、手を繋ぐのが当たり前というのを見せつけられているような気がする。

美鈴は、これに憧れを持ったのか憚るコトなく言い出してきたのだ。

「恥ずかしくない？」

さすがの俺もこの時は照れた。

「私は大丈夫だよ。翔平君が、嫌って言うんなら無理にとは言わないけど……。」

「全然嫌じゃないよ！！でも、俺でいいのかな？って思っちゃってね……。」

「翔平君だから……繋ぎたいの。」

俺はこの時ドキンという気持ちになってしまった。

そう、とても照れくさくなるような感じだ。

「美鈴がいいんなら俺もいいよ。」

と、頭をポリポリかきながら答えた。

「じゃあ、繋ごつか。」

俺と美鈴の手と手が重なった。

美鈴の手は可愛らしくて、幼いような感じのようにも思えた。

希望と願望に輝いているような手、人の心を見透かすような手、美鈴の手に触れただけで色々な感情が湧きあがってくる。

「どうしたの？ 翔平君。」

「いや、美鈴の手があまりにもちっちゃくて、可愛らしいからちよつと見とれてしまっただけ。」

「もう、翔平君ったら……。」

美鈴はかなり赤面していた。

この表情が可愛くしょうがない気持ちになってしまった。

このまま……恋人同士になってもいいかなと脳裏に過ぎった。

でも、やっぱり心の中でなぜかそれを隔ててしまっ。 何でだろ  
う……。

「ねえ翔平君、ここに行ってみない？」

美鈴が差している指の先には、「占い」と大きな文字で書かれたデントを差していた。

「占いか・・・。」

「翔平君って占い信じる？」

「うん・・・。信じない方かな。」

「へえ〜。そうなんだ・・・。」

「美鈴は信じる系？」

「うん、信じるよ。だからね、それよってその日はテンションが上がるか、上がらないかになっちゃうんだよね。」

「でも、占いは全てが当たるとは限らないから、運勢が悪くたってそんなに考え込む必要はないと思うけど・・・。」

「でも、悪いより良いって言われた方がいいでしょ？」

「んまあ、そうだけど・・・。」

俺には美鈴の言ってるコトが分からなかった。

占いてそんなに頭を悩ますモノなのか・・・？と。

「翔平君、行ってみようよ。何か面白いかも」

美鈴は乗り気だ。

「・・・分かった。それじゃあ、行こうか。」

俺は、彼女の期待に裏切らないようにと、仕方が無い気持ちで乗った。

その言葉と共に、俺たちは、暗いテントの中に足を踏み入れていった。

「こんにちは。」

俺たちはテントの入り口付近のカーテンらしきモノを退けた状態で挨拶をした。

「いらっしゃい。」

とてもお淑やかな声だ。

この声だけで、心身共に癒してくれそうな・・・そんな感じを覚えてしまう。

それに、自分の憧れのおばあちゃん像をも生み出すような情操のよ  
うな気分にもなってしまう。

目は、透明な緑色を帯びている。

その目は、今まで何人もの人々を見てきたような目、相手の感情をも透かさせて見るような目、その人の未来像をも見れるような目であるように見えてくる。

顔のしわは、今までの人生の中での、苦難を乗り越えた証のようにも見えてくる。

そう、細木数子よりもむちゃくちゃおっとりした感情の人だ。

入り口から入ってすぐに、椅子二つとその前にカウンターのような長テーブルが用意された状態となっていて、その長テーブルの先にお婆さんが座った状態となっている。

「宜しく願いますう」。

美鈴はお辞儀をして答えた。      どうやら美鈴は、はりきってるっぽい……。

美鈴の挨拶と共に、俺たちは椅子に座った。

「今日は何のようじゃ？」

「私たちのこれからのコトとか、私たちの相性とかについて教えて頂きたいのですが……。」

美鈴は手と手をかね合わせ、淡々と述べた。

俺はそんな美鈴の姿を、ただ呆然と見つめるコトしか出来なかった。

「相性は言うまでもなく抜群に良いようじゃ。友達同士、それ以上の関係でも言うコトないわい。」

お婆さんは、二人の顔をじゅっと見つめながら答えた。

「そうなんですかあ」

美鈴は、一人テンションが高くなっている。

「そちらの女の方は、どうやら恋愛には困らんようじゃ。容姿、スタイル抜群。頭脳明晰。澄んだ心の持ち主。ここまで持つておいて、未だに恋愛の一つもしたないなんぞ、勿体無いコトじゃわい……。このお方は、世の男性の憧れの的となるお方じゃからな……。

じゃが、これだけは、聞きなされ。恋愛するのは勝手じゃ。じゃが、その相手をよく選ばなければならんぞ？ 世の中には沢山、濁った心の持ち主も存在するんじゃ。ソナタを遊び半分で付き合う輩がいても不思議じゃないわい。そやつらに、惑わされるな。いことのないようにじゃ。もし、その悪い輩と相手をしてしまつたら、ソナタの心も濁つてしまふじゃろう。目標物を失い、縛られるコトのない世界にへと足を踏みいれてしまふじゃろうに……。そうなれば、ソナタはソナタで無くなる。そのあまりにも快感な世界を体感してしまわぬように……。でも、その男性なら大丈夫じゃ。その男性は、とても温厚で純粹じゃ。このワシが保障する。とても良いお方じゃよ。」

美鈴は、うんうんと頷いている。

「恋人関係同士になれば、そなた達は幸福になるじやろう。じゃが、それまでに問題があるんじゃないけどな……。」

「問題って何なんですか？」

美鈴は、とても真剣な目で問い質している。

「それは、そちらの男性にあるんじゃない。そちらの男性には、どうやら自分の気持ちをあやふやにするモノが存在するらしいのじゃ。自分の気持ちを隔てているモノ……これを解決するには、ちと大変じやろう。それは、自分が一番知っているじやろうに……。じやが、それを切り開いたそちらの男性には、思いがけない未来が待ち受けているじやろう。その未来こそ、そちらの男性が求めているモノ。そして、かけがえのないものへと変わっていくのじゃ。」

「……。」

俺は、閉じない口を感じながらも絶句した。

この俺の気持ちをズバツと当てたのには、さすがに驚いた。

それを一緒に聞いていた美鈴も美鈴で、寂しげな表情を見せてこっちを見ている。

美鈴にはどうやらその『隔てているモノ』というのが想像がついているようだ。

「じやが、その隔てている『モノ』はじやな、時が経つにつれ、どんどん浄化していくじやろう。要するにじや、焦らず、時間をかけてゆっくりと時を過ごせば何とかなるものじゃ。ソナタにとって、



幸運が起きることを祈っておるぞよ。」

お婆さんは、自分の言いたかった全ての言い分を言い終えると、ニッコリ俺たちにニッコリ微笑んだ。

「お婆さん、今日はどうもありがとう御座いました。お婆さんは、私今までに見てきた占いで、最高の占いですよ。その後のアドバイスも良かったですし……。本当にありがとう御座いました。」

美鈴は、いつも間にかテンションが戻ったようだった……。いや、そ〜いう素振りを見せているに過ぎなかった。それは、この俺でも分からせる程のモノだった。

「そなた達に、ご冥福を……。」

お婆さんは、そう言って祈願していた。

俺も俺で、美鈴がテントから出た後、深いお辞儀をしてその場を去った。

「今日は楽しかったね。」

あの後、俺たちはゲーセンやら、洋服屋やらに寄って、バスから学校まで来て、それから歩き状態となっている。

日は、もう傾きかけている。

夕焼けを見れば、さっきまでの事々が懐かしく、脳を刺激してくる。

「ねえ、翔平君……。」

美鈴は、納得のイカナイ表情を見せた。

「何？」

俺は何となく何が言いたいか分かった。この美鈴の表情からなら恐らく……。

「さっきの占いホント当たってたね。私もビックリしたよ。翔平君も当たってた？」

やっぱり、占いコトだった。

「当たってたな……。」

俺は、限らない遠くの風景を見ながら答えた。

「それじゃあ、やっぱりあの話は……。」

美鈴は美鈴で下を向いてしまった。

「うん、そっくりそのままだね……。」

美鈴はまだ下を向いている。何かの答えに辿り着いて、落ち込んでいると言った様子だ。

「もしかして……、その『隔てているモノ』って愛美さんのコト

なんじゃ・・・。」

美鈴が何やらボソっと言った。

「え？」

「ううん。何でもない。 えへへ」

美鈴はようやく下を向くのを止めて、こっちを向いて、ニコツとしている。

しかし、その笑みは造り笑顔となっていた。

「今日は、とても楽しかった　しかも相手が翔平君ですごく良かったよ　今日はホントにアリガトね。　それじゃあ、また学校でね！　バイバイ。」

「あ、ちょ、ちょっと・・・。」

俺は、美鈴に手を差し伸ばした。

でも、もう美鈴は俺の隣にはいなかった。

25M程遠くを見ていると、美鈴は、何かモヤモヤを胸に秘めたままのような感じで、足早に去っていくようにも見えた。

PHASE・09 デート（後編）（後書き）

1 回消してしまったんで、もう1回書くのに時間がかかってしまいました。

PHASE・10 迷う想い（春風美鈴編）

「ふんふんふん」

「美鈴、今日はやけにご機嫌だね。鼻歌まで歌っちゃって。」

「別にいつも通りだよ」

「はーん、さては、例の男の子のコトでしょ？」

「もう、香織ったらー！ 翔平君とは、そんなんじゃないってば！」

「あらあら美鈴さん、そんなこと言っちゃっても良かったのかな？」

「・・・やっぱり前言撤回をお願いします。」

「分かれば宜しい。」

食堂では、二人の女性の会話が進んでいる。

「しかし、あの不器用な美鈴が異性の子とそこまで発展していくなんてね・・・。その翔平くんって子、美鈴を何か惹きつかせるモノでも持ってるんじゃないかね。」

「は、発展って・・・。」

「それで、どこまでいったの？ キス？」

「そんなレベルじゃないってば・・・。」

「え？ 何々？ まさか、それ以上の関係まで・・・！」

「ち、違っつてばあ！ そこまでいってないってコトだよ・・・。」

美鈴はかなり赤面している。

「あは・・・、そうだね。ビックリしちゃった。」

「香織ったら、気が早すぎだよ・・・。」

美鈴は辺りを見回している。

「じゃあ聞くけど美鈴はキスとか、それ以上の関係は考えないの？  
女の子なら普通、そこまで意識するもんだよ？」

「そ、それは・・・。」

美鈴は何やらモジモジしている。

「だ、だって・・・、何か恥ずかしいもん・・・。」

「あらあら美鈴さん。あなた、良くそこまで言えるものなのですね。」

「え？」

「誰だったかなあ。　昼食の時、例の男の子の頬にペロペロしてた人は。」

美鈴の顔が驚きから徐々に赤面に変わっていく。

「香織！　な、何で知ってるの！？」

「さあ、何でしょうね。」

とてもさり気ない返事だ。

「うっう・・・、恥ずかしい・・・。」

「まあ、アタシの情報網はスゴイですから」

自信満々の笑み。

「聞かないコトにしておきます・・・。」

美鈴は、何かを悟ったのか観念した。

「へえ、でも、美鈴から誘ったんだ。　スゴイじゃない。」

「何か私ね、翔平君といると、人が変わると言うか何というか・・・。そんなになっちゃうの。」

「それはね、美鈴。好きな男の子だからそうなっちゃうのよ。自分を良く見せたい、自分にもっと注目して欲しいという欲が出てきて、そうなってしまうものなの。」

「・・・私、翔平君に『私、翔平君にとっても興味を持ってしまった』と言ってしまった。だけど・・・。」

「好きなのね？」

「・・・うん、好き。」

美鈴は、少し照れている。

「美鈴、やっと自分の言葉ではっきり言ったね。『好き』ということ。内面で思っているよりも、言葉に出して言ってみるとちょっと違う風にも思えるのよ。人間、耳があるから、聞いて実感しないと分からないコトもいっぱいあるのよ。」

美鈴はうんうんう頷いている。

「告白したら？ その誘いを受けたってコトは少なくとも、『付き合ってもいい』って思ってるはずよ。」

「それは、無理かもしれない・・・。」

今の美鈴には、この提案を素直に受け入れるコトが出来ないみたいだ。



そして美鈴の顔がだんだん険しくなる。

「何でそう思うの？」

「彼には・・・、愛美さんがいるから・・・。」

「愛美さんって？」

「彼の幼馴染の女の子。二人いつもいつも仲が良いの・・・。」

美鈴はこの証言を言ったと同時に、あの『壁』というモノまで脳裏に浮かんだ。

「だから、どうせダメなの・・・。幼馴染っていうコトで、それなりの時と一緒に過ごしてるし・・・。私には・・・。」

美鈴は、あの時のモヤモヤが言葉と化して出てきた。

「だから何？」

「え？」

「恋愛に至るまでには、お互いに過ごした時間の量が必要なの？  
美鈴、その考え甘いわよ。恋愛って言うのはね、今まで過ごした時間の量よりももっと必要なモノがあるのよ。美鈴それが何か分かる？」

「相手を良く理解すること？」

「少しおいしいわね。」

「じゃあ、何？」

「他人よりもその人を強く想うコト（量）。いくら過ごした時間が長いからって、いくら相手を良く理解したって、最終的にはその人をどれだけ想っているかになるの。他の人よりも、自分が強く想う。そして、いずれそれは、何らかの形で相手に伝わる。心が揺らいでる人にそれが伝わったらどうなるか分かってるわよね？」

「……。」

「その二人って付き合ってるの？」

「付き合っではないみたいだけど……。」

「だったらいいじゃない。もし、その愛美さんへの想いが強かったら、美鈴の誘いを受けてないと思うよ。」

「それは、そうだけど……。」

やはり美鈴は、まだ『壁』という文字を背負っているようだ。

「美鈴って上からサイズ何だったっけ？」

「えーっと、上から、『88』『59』『87』で身長は162cmだったよ。」

「さすがは、アイドルね……。美鈴、もっと自身を持ちなさい。アナタこの学校のアイドルなんでしょ？逆に考えて、アイドルを振

る男性なんて考えられると思う?。」

「好きでアイドルになったわけではないんだけど……。それに、アイドルだからって、100%成功するとは限らないよ。みんなそれぞれ好みのタイプっていうものもあるし……。」

「成るほどね。美鈴はそこまで考えてるんだね。それが美鈴の良い所でもあると思うよ。美鈴がそこまで考えてるなんて思わなかったから、ここまで簡単に言っちゃったよ。ごめんね。」

「うっん、謝らなくていいのよ。私が、恋に臆病なばかりだから……。それに、私、A型で心配性だし……。根に持っちゃうし……。」

「美鈴A型だったんだね。A型か……。それならしょうがないわね。あ、ちなみに私はO型ね。」

「香織O型だったんだ。あ、言われてみればそんな感じ……。だね。何かO型って大らかな人多いし、喋りやすいから私好きだな。」

「A型はどっちかって言うとお内気が多いからね。そんなO型とA型がくっつくとお良く合うって言われてるみたいだしね。」

「じゃあ、私たちって合う方に入ってるんだね。何かこういうのいいよね。」

「うん、そうだよな。あ、その例の男の子の血液型は何なの?。」

「分かんない……。今度聞いてみよっかな。」

「聞いたら教えてね。私こゝいうの興味持っちゃうタチなんで。人の誕生日、星座、血液型とかね。」

「うん、分かった。聞いたら教えるね。」

とまあ、血液型関連の話に移っていつてしまった。

と、ここでもようやく本題に入って、

「美鈴、もし、美鈴が『今の関係よりも進展したいと強く思う』なら、『告白』を考えた方がいいと思うよ。私が言えるのはここまでだけになっちゃうけど……。役に立たなくてゴメンね。」

「ううん。香織はすごく役に立ったよ。私も、もう一度自分と向き合ってみるようになるね。今のままでいいのか、それとも……。つてね。あと、香織の助言で今日はむっちゃくちゃ気が楽になっちゃったからね。感謝してる。」

「美鈴、今はそゝいうモヤモヤがあつてしょうがないんだよ。それがあるからこそ、恋愛っていうものが成り立つんだからね。頑張つてね。これからも美鈴の恋、応援する。」

「うん、色々と香織ありがとう。私ももう少し考え直すね。今日はホントに相談に乗ってくれてありがとうね。」

「いえいえ。あ、そろそろ時間だね。じゃあ美鈴、またね。バイバイ。」

「うん、バイバイ。」

これによって美鈴の心はどう変化したのだろうか。

そして、これからの行動をどう取るというのだろうか。

果たしてこの先には一体何が・・・。

PHASE・10 迷う想い（春風美鈴編）（後書き）

ほとんど会話だけになってしまいました。

## PHASE - 11 テスト返し

「さーこれからテストを返すぞ。心してかかるように。」

無音にも響くこの声…あの人しかいない…。

「では、出席番号順に取りにきてちょ。」

退屈こと、DS先生だ。

「今日も先生ノリノリだね。」

「いや、あれはノリノリというか、俺たちを見下しているようにしか聞こえないが…。」

俺たちは先生の大げさな身振り手振りが大きく目に入っていた。

「でも、あーいう先生って何か憎めませんよね。」

「憎めないというか…、呆れるというか…。」

美鈴は美鈴で、困った笑みをしている。

徐々に自分の順番が迫ってきている。

たった1分くらいしか待たないのに、それがスローモーションのようになんて長く感じてしょうがない。

「私今回手応え無かったからヤバイかも…。」

「私もです。入学してから全然勉強に身が入らなくて…。恐いです。」

二人は二人して、俺の今の心境をあざ笑うかのように、二人の表情と二人の言動が一致していない。

何か、変な気持ち…。

と、ここで俺に順番が回ってきたみたいだ。

俺は、恐る恐る教卓へと近づいていった。

返ってきて欲しいような…、返ってきてほしくないような…。

微妙な感情が、さらに脳を刺激する。

「お、君は確か…。転校生か？」

「岸田翔平です！ いい加減名前覚えて下さい！」

「あゝあ、そうか、そうだったな。」

悪気があるのか、ないのかホントに分からない先生…。

それは、ともかく先生から手渡されたテストを見た。



「……。」

言葉が出ない…、この点数。

「君の頭大丈夫なのかなあ？」

グサッ！

アンタに言われたくない…。

しかも嫌みつたらしい言い方。

「その点数からすると、学年順位は…どうだろね。」

グサッ！グサッ！

考えたくもない現実…。

ホントに悪気があるのか、ないのか分からない。 いや、でも悪気ありそう。

「翔ちゃんどうだった？」

「翔平君、どうでした？」

グサッ！グサッ！グサッ！

二人一緒に聞くなよ…。

「ノーコメントで。」

「あ、まさか翔ちゃん、またやらかしたんだね。 ホンットに成長しないんだから。」

グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！

「翔平君、前からこんな感じなんですか？」

グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！

『こんな』って…。

「そうなのよね。 中学校の頃からそれなりに勉強してるくせに報われてないんだよね。」

グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！

「そうなんですか…。」

「良い時もあるんだけど、でも悪いときが多いから、見てる私が呆れちゃうって感じなんだよね。」

グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！グサッ！

「可愛そうな翔平君。」

グサッ！

ホントに俺可愛そう…。

先生にあれだけ言われた後に、またこれだけ言われる…。

久しぶりに、精神崩壊の危機に直面しそうになった。

「あ、私の番みたい。行ってくるね。」

と言が残して、愛美は教卓へと歩んでいった。

（ふつ、せいぜい俺と同じ悲しみを味わうんだな。）と悪魔みたいなコトを思ってしまった。

どんどん、愛美は先生の方へと到達しようとしている。

そして、先生からテストを受け取る瞬間に、

「あ、え〜と君は確か、バ・力恋・学・見だったか？」

と何とも言えない表情で言っている。

「華恋・愛美です！ もう先生ってば、わざと言っててるんですか！？」

「いやいやゴメンゴメン。またミスっちゃったな。」

先生は先生で、頭を掻きながら苦笑いしている。

「もー、しっかりして下さいよ。」

愛美の機嫌のパラメータが徐々に急降下している。

「ああ、これから気をつけるよ。多分…。」

「多分だけ余計です!!」

愛美はテストを引つ手繰って、自分の席の方へと足を進ませている。

「愛美どうだった?」

俺は、薄気味悪い笑みを浮かべながら問いかけた。

「どうもしない。」

愛美は相当機嫌が悪いみたいだ。

「はーん、さては悪かったんだろ??」

「別に。」

「認めるよ。」

「もうー! うるさいわねー!! アンタには関係ないでしょ!!」

怒り心頭の愛美。

「ま、愛美…？」

俺はマジ焦った。こんな愛美久々だったからだ。

「あ…、今は話かけないで…。」

ようやく落ち着いたみたいだ。

「翔平君、ちょっと言い過ぎましたね。」

（あの…、さっきアンタ等に思いっきり言われたんですけど…）って内心強く思った。

「あ、そろそろ私の番ですね。では、行ってきますね。」

愛美と違ってお上品な仕草が何とも言えない。

愛美は愛美で何やらプンプンしている。どうしたのだろうか…？

美鈴の行く姿に目を追っている男子生徒が何人か見られる。

その歩き方は、とても品があって、アイドルそのものと言える。

「お、君は確か新入生代表の、春風・ブス図ではないか。」

この言葉が自然的に入ってきた男子は、先生をギロと、殺気満ち溢れた顔で睨んだ。

「春風・美鈴です…。」

この視線を目のあたりにした先生は、焦ったのか、

「いやいや、スマンスマン。美鈴だったね。許してくれい。」

と拝んでいるように謝っている。

「・・・名前を間違えるなんて誰にでもあることですから…。」

美鈴の冷ややかな目。

さすがの先生でも、この時ばかりは悔いありの瞬間にすぎなかった。

「美鈴く、どうだった？」

「どうもありません。」

膨れっ面の美鈴。さすがに機嫌が悪いみたいだ。

「まさか美鈴も、めっちゃめっちゃ悪かったとか？」

「別にそんなんじゃないやありません。」

「じゃあ、変なことやらか・・・。」

「ちょっと静かにして頂けますか？」

美鈴の生命力に欠けた瞳が何かを物語っていた。

愛美も愛美であぐだし、美鈴も美鈴であぐだし、俺も俺であぐだし、良く分かんないや。

「それでは、テストを返したコトだし、授業に・・・。」

とその時、教室の扉が開いた。

「おいDS。彼女のヤマンバさんからの電話だぞ。何やら急の用らしい。」

何やら、分けの分からぬハゲ教頭が出てきた。

「あ、これはこれは教頭。お久しぶりです。」

「いや、いつも会ってるであろっに・・・。」

教頭も教頭でため息をついている。

それと同じくして、ハゲもハゲで乗り気のない光のオーラを漂わせている。

「では、皆の諸君。自習という形で、宜しく〜。」

と、簡単に言い残して、そそくさと出て行った。

ホントに軽くて、イマイチつかめない先生だ…。

「何だかな〜…。」

このユーモアすぎる先生を目の前にして、俺はどうしようもない感情に浸ってしまった。



**PHASE - 11    テスト返し（後書き）**

3日～9日にかけて更新しようと心掛けております。

PHASE - 12 戸惑う想い

「え、美鈴この前のテスト学年順位1位だったの？」

俺は、驚きの声と共に声が大きくなってしまった。

「声がでかいです…。」

美鈴は、何とも言えぬ表情で辺りに視線を漂わせた。

「あ、ごめん…。それで、5教科何点だったの？」

「確か、495点だったと思います。」

「…。」

この凄すぎる現実に、俺は圧倒された。

そう、平均が99点だなんて…。

「翔平君は、何点だったんですか？」

「370点…。」

この凄すぎるモノを突きつけられて、俺は良く言えたと思う。

今、俺たちは二人で食堂で食事を取っている。

周囲には、全校生徒の約60%は、この食堂にいる状態となっている。

他人からの視線は？と聞かれれば、ないとは応えられない。

首をかしげている人や、嫉妬の表情を思い浮かべている人など、多種多様の喜怒哀楽が見られる。

しかし、美鈴の態度は、どうやらプライベート用と学校生活用と分けて良いらしい。

そりゃあ、こゝいう人は少なくはないけど、でも、この変わりぶりを見ていると、何か違和感みたいなモノを感じてしまうがない。

そうこう思っていると、

「あれ、愛美さんじゃありませんか？」

美鈴の視線を俺も同じように辿っていくと、そこには、愛美と男子生徒が楽しそうな話をしながら隣合わせになって歩いている。

「愛美さん、楽しそうですね。」

「どうだかね……。」

「いいんですか？」

「べ、別に俺は、アイツが誰と、どうイチャつこうが関係ないし…。」

果たして、この言動と内心はぴったり重なるのか？

それとも…。

「それにしても、愛美さん随分と楽しそうですね。」

言われてみれば確かに…。

あの二人以外の立場から見たら、思いつきりカップルと思える人が普通であろう。

そう、それくらい良い感じに見えるといえるのだ。

「あの二人付き合ってるんでしょうか？」

「さあな。でも、あの愛美の可愛さなら当然と言えるべきだしな。」

「確か、中学時代に告白を何回かされたって言ってましたしね…。」

「人数は覚えてないけど、全校生徒の約70%らしいらしい。」

「へえ…。それはすごいですね…。」

いや、美鈴の方もスゴイと思う。

ふと、携帯の時計を見てみると、もう授業の始まる2分前だ。

「あ、そろそろお昼休みが終わっちゃいますね。」

「そうだね。そろそろ行こっか。」

「うん。」

ようやく、長いようで短いような昼休みに終止符が打たれた

「え〜と、では、不定詞は…。」

と、先生の声が入ってくるような、入ってこないような…。

授業は、かつたるい。

さっきまでの時間が愛おしくてたまらない。

友達と話をしたり、遊んだり、このユトリのある時間が。

外を見たり、眠そうな面を見せたりと、俺はやる気ナッシングのモードに入っている。

美鈴は美鈴で、真剣に集中して授業を受けている。

この集中力のオーラを感じると、『さすが』という言葉しか出ない。そんなもって、愛美は愛美で、どうやら先生に見られぬように、机の中の方へ携帯を忍び込ませていじっている。どうやら誰かとメールを打っているようだ。

けど、1件1件のメール送信が終わる度に、今行われている授業に、説教的に受け入れているように見える。

この仕草は、やはり賢い&器用な者しか出来ぬと思った。

そうこう思っている内に、俺はだんだん意識が遠のいていった。

「……くん。」

「……ちゃん。」

「……へい……くん。」

何か天から生優しい声を感じる。

「しょう……う……へ……いくん。」

「しょう……ちゃん。」

その声は、だんだんと大きく聞こえてくる。

「翔平君！」

「もう、翔ちゃんってば。」

「・・・！」

気がついた時、二人の女性がこっちを向いて立っていた。

「やっと起きたましたね。」

「チャイム鳴って、HRも終わって、その間ずっと寝てたんだよ？」

「あ・・・れ、も・・・う放課・・・後？」

俺は、目を擦りながら辺りを見回した。

「まだ寝ぼけてるみたいですね。」

「ほら、翔ちゃんシャキッとしなさい。」

俺の意識がだんだんとハッキリしてくる。

「では、私は先に帰らせて頂きますね。」

美鈴は、机の上に置いてあるカバンに手を置いた。

「あ、ああ。」

「春風さん、また明日学校でね。」

「はい、では失礼します。」

美鈴は、やる事を済ましたせいか、さっさと帰っていった。

「じゃあ、私たちも帰ろっか。」

「・・・え？」

「『え』って何よ？」

「あ、いやいや、何でもないよ。」

俺は、この状況に疑問を抱くコトしか出来なかった

「今日は何か心地よい天気だね。」

空は、雲一つ見かけない。

そして、自分達の頬をかすれる風が本来の自分を取り戻させるような感じになってしょうがない。



季節はもうすぐ夏に傾こうとしている。

その準備のせいか、虫たち、木の葉たちが次々と色々な準備をしているコトが目につく。

「ねえ、翔ちゃん…。」

「何？」

愛美が何やら、また思いつめた表情を見せている。

「もしさあ、好きな人と一緒にいたら何したいと思う？」

「き、急にどうしたんだよ？」

いきなりこんな事を言われても・・・っていう情しか感じとることしか出来なかった。

「私さあ、ホントは今好きな人がいるんだよね・・・。」

「え・・・？」

これは、やっぱりと言つべきか、何と言つべきか・・・。

「え、誰々？」

想像はつくけど、やっぱり聞いてしまう。

「ひ・み・つ」

「いいじゃん、別に教えてくれたってさ。俺たち友達だろ？」

「と、ともだち。」

愛美は何やら下を向いてしまった。

「もしかして、今日の昼一緒にいた人なんじゃない？」

内心、ちよつと複雑な面持ちだ。

「あ、見てたの？」

「いや、だって普通に目に入ってきたよ……。」

どうやら、あの時の愛美は俺たちに気付いてなかったらしい。

「うん……。どうだろね。」

「いや、その人しかいないじゃん。しかもちよつと大人っぽかったし。」

「うんと、アノ人はね、星垣先輩。星垣・悠也先輩。ほしがき・ゆうや同じ委員会仲間なんだよね。」

「あれ、愛美、委員会に入ってたんだ？」

「あれ、言わなかったっけ？うん、入ってるよ。」

「へえ……。」

「それでね、ある時一緒に委員会の仕事をして、色々なコトを教えてもらったり、親切にしてもらったりしてくれてるの。」

「今日も、その委員会の仕事で一緒にいたわけってこと？」

「ううん、今日は仕事ないよ。一緒にお昼ご飯食って、それで一緒に校内をブラブラしてただけだよ。」

「そこまで進展してるんだ。」

俺は、内心ちょっと変な気分だ。

「ううん…。そういう風に見えちゃう？」

「いや、だって一緒に飯食ったり、一緒に行動してたりしたら誰だってそういう風には…。」

「だったら、翔ちゃんもその中に入っちゃうね。」

「俺は、まあ…。単なるアレであって…。」

「ふん、『アレ』でごまかすんだ。」

でも、言われてみれば確かに。

「付き合わないの？あんなにカッコ良くて、優しそうな人と。」

「どうだろね…。そんなに聞きたいの？」

愛美は何やら寂しそうな眼差しを俺に向けている。

「・・・まあ、こゝという話は一応聞いてみたいじゃん。」

「何で？」

「今回は、その人を受け入れるんじゃないかなって思っで。」

「だったらどうする？」

「え・・・？」

「受け入れちゃダメなの？」

愛美はさらに思いつめた表情を見せる。こんな愛美は初めてだ。

「な、何で俺に聞くんだよ・・・。」

「だって、翔ちゃんここまでしつこく聞いてくるんだもん。何かダメなのかなって思っで。」

「べ、別にそれは、愛美の自由だろ？」

「・・・確かにそうだけど・・・。」

「で、どうなんだよ？そこところハッキリしちやおうぜ。」

「ハッキリしないのは翔ちゃんの方でしょ・・・。」

愛美は何やらボソっと言った。

「え……。」

何だろうなこの微妙な気持ちは。

「実はね、今週末に先輩の家に誘われちゃったんだ。」

愛美は懺悔を行っているように見えてしまう。

「ま、マジかよ?。」

「うん。それでね、今どうしようか迷ってるたんだよね……。」

「まだ、付き合ってもないのに、それって早くない?。」

「うん、私もそう思う。でも、何か『言いたいコト』とか、色々なコトとかしたいからって呼んでくれたみたい。」

「『色々なコト』って……。」

この愛美のエロイ身体を見たら、その星垣先輩という奴は一体どういう行動に踏み切ってしまうのだろうか……。まさか……とは思ってしまいそう。

俺は何て言ったらいいか分からなくなってしまいそうだ。

「はあ、どうしたらいいんだろ……。翔ちゃん家なら、喜んで行くのに……。」

「……。」

この発言は果たして何を意味しているのだろうか？

「愛美が、その人のコトを好きだったら、行けばいいし、好きじゃなかったら行かなくていい。そういうコトだと思うよ。」

「難しいことを言うんだね…。」

いや、普通に難しくはないだろう。

愛美は、そこんところをはつきりしたからない。なぜだろう…。

「あ、そうだ、そーいえば翔ちゃんのメルアド聞いてなかったよね？　ねえねえ、教えてよ。」

「・・・？　別にいいけど…。」

何で急にこんな話になったんだろう、そちらに疑問が抱く。

こうして、俺たちは無事にアドレス交換を果たした。

「でも、急に何で俺のアドだなんて・・・？」

「・・・、何か聞いてみたかった。色々と相談相手にもなるし。」

そーいうことか。

「んで、どうするんだよ？」

「もう1回家に帰って決めてみる…。」

「・・・そう。」

俺は、どんどん今の空気が重くなることに気がつく。

気がつくと、もうそよ風公園に着いている。

日は傾き、天を見ると、漆黒の闇に包むような気配を見せている。

電灯もつき始め、微妙な橙が今のこの世の中の未熟さを表しているようにも見えてしまう。

「ここで、お別れだね。」

空は、もうすぐ闇に包まれる。

「翔ちゃん、もう1回最後に聞くけど、『好きな人と一緒にいたら何したい?』」

愛美はじゅっところちを見つめている。

「人に聞く前に、まず、自分から言うもんなんじゃない?」

「翔ちゃんってホントにいじわるなんだね…。」

「これは、理屈だ。」

「分かったわよ…。絶対翔ちゃんも言つてよ？もし言わなかったら絶対だからね！」

「お、おう分かった。」

「それでは、言います…。『イチヤイチヤしたり、色々なコトをしたい』ことです…。」

愛美はむっちゃんくちや頬を赤くしている。

「『色々なコト』って？」

「女の子にそういうコト言わすの？翔ちゃん最っ低だよ…。」

「あ、ゴメンゴメン。空気読めなかったね。」

「ホントだよ…。」

「じゃあ、俺はこれで。」

「しょうちゃん。」

「分かったよ、俺は『愛美と同じ』ということぞ。」

俺は、この時二つの意味があることに気がついてしまった。

「ふん」



この答えでよかったのかな。

「じゃあ、翔ちゃん、また学校でね。バイ」

どうやら愛美はいつもの愛美に戻っているっぽい。

「うん、それじゃあ。」

勿論あの話のコトは忘れてない。

果たして、愛美はどう動くのだろうか…。

PHASE - 12 戸惑う想い（後書き）

やっと書けました。結構月日が経ってしまったので、少し違和感を感じるかもしれませんが、ご了承下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7997a/>

---

本命は・・・

2011年2月21日19時20分発行